

## 美術の窓(22)

## 奈良県美のグレコ展

大和文華館館長 吉川逸治

グレコは、西洋の近世絵画史の中で、辻惟雄教授の分類法を仮れば、異想の画家となる。それ故、永い間広く識られず、熱狂的な信心家であったスペイン王フェリーペ二世にも、苦心の作品を認められず、生涯、トレードで、彼の芸術を愛する教養高い人々の狭いサークルに支持されながら、静かに純粋絵画の途を歩んだらしい。

この展覧会を企画し、実現した国立西洋美術館の諸兄の優れた見識と執拗な努力に感心し、このように選ばれた作品を数々の外国の美術館や所蔵家方が長期間に渡って貸出して下さったことに観客の一人として感謝します。奈良は、シルクロードの東端として、その同じ道の西端の古都トレードと友好都市であるということが、一段とこの催しに意義を添えましょう。

私は2月1日に奈良県立美術館に行ったのですが、場内は鑑賞される方々の熱気で溢れ、私自身、仏教の古都奈良に居るのを忘れて、あの古代の面影に、イスラム建築の装い、ユダヤ教の趣きが残るキリスト教の古都トレードに遊び、グレコの名画の懸る御堂を訪ね、感嘆する思いを味わいました。

私が初めてグレコをまとめて見たのは、もう半世紀以前、パリの有名な画廊で行われた当時のパルカンの一王室コレクションのグレコ名画展で、すっかり感激して、幾度か通い、勉強のため、美術図

書館でコシオやマイヤーという当時の数少ない専門家の本も見せてもらいました。現代美術批評家たちの方からも、青のピカソとか、セザンヌの人物画のなにがしとか、やれ「純粋絵画」、やれ「超現実主義」との関係と言って、グレコのうちに共通点を求めよう、認めようとする論も出で賑やかでした。

グレコ再評価の先鞭をつけたこのコレクションは元来、19世紀の展覧会の数年後でしたが、丁度、私は「サン・サヴァンの黙示録」の論文を書き上げたところだったので、一息に読み通しました。

このグレコ再評価の先鞭をつけたコレクションは元来、19世紀のフランス王政復興後の一王が集めたもので、「フェリーペ二世の夢」、「聖モウリスの殉教」から晩年のマリアの生涯など、貴重な作品が多かったのですが、1848年の革命に際して、ロンドンで競売になり、ルーヴルに残らず国外に去ったとフランス人は惜しがっていました。

奈良のグレコ展で、若いグレコを援助したクロアチア出身の画家ジュリオ・クロヴィオの肖像が出てくるのは面白い。この人が、グレコをティツィアノの弟子で、肖像画では当代彼の右に出るものは居りませんと言って、ローマの貴族ファルネーゼ家に紹介しているのです。

故郷でビザンティン絵画の技術を習熟した上、ヴェネツィアへ来



受胎告知(部分) エル・グレコ作 プラード美術館蔵

て、ティツィアノのもとに弟子入りし、新しいルネサンス画法を学び、同時にルネサンス様式の建築、装飾、構図、透視図法など一通り学び終って、西欧画家として、大祭壇の宗教画の構成、単独の祭壇画もできれば、中品、大作の肖像も描きこなせるまでになりました。

ただ彼が他の西欧画家とちがうのは、ビザンティン・アイコン芸術が中世を通じて精練してきた純粋色彩の使用法を心得ていることで(この点は平安仏画に親しんでいる我々が何の抵抗もなく彼の色彩に共鳴できる原因でしょう)、純粋色彩への復帰は意外に早く、スペインに移って、聖セヴァステリアノ像から聖女マグダラのマリア像、聖家族へと鋭いデッサンとともに清らかな明色が豊かな半色調、濃い暗調と融合しながら、人物を引締め、人物の動勢と渾然一体となるように、岩・木・雲など附属物やバックを明暗のリズムで構成します。これは、特に大きな祭壇構成で多数の人物からなる複雑な画面に著しく、純粋明色が輝けば、それを暗色が周囲から引締め、明暗は交互に微妙に振動し、画面全体が明暗と諸色の奏でる旋律で響きわたるのです。

南北ヨーロッパの美術で15世紀の執拗な、適確な写実主義に風靡された情勢が、16世紀から古代の古典様式の理解と再興によって、品格をもつ大様式に整頓され、人

間像も自然像も、ふたたび豊かな観念内容をもつ形象に理想化されます。古代の彫刻を再生することを知った彫刻家のミケランジェロの役割が新しい芸術を生むために圧倒的であったし、彼の人間像の役割を理解したラファエルロ、ティツィアノ、ティントレットの活躍が主流になっていました。

この状態をグレコは、イタリアに来て、悟り、まづリアリズムで彼の古いビザンティニズムを清算し、その上で急いでミケランジェロたちの古典美術を消化し、それが終ると、ビザンティニズムを新しく再生させます。ここで大切なのは、やはり彼の“写実”で、これが骨法用筆となって、すべてを組立てるのです。ジュリオ・クロヴィオはいみじくもこれを見抜いて肖像画家としての彼を賞めるのですが、実に彼の肖像画ほどよくグレコ芸術の要所、秘密を教えてくださいません。

グレコの写実は、15世紀の写実主義ではなく、新しい視覚の写実主義なので(今回出陣のコバルピヤスの肖像参照)、それ故、彼はベラスケスを啓発し、ゴヤから印象派にいたる新しい視覚の開発の先導者だったのです。ここで彼の純粋色彩が生きてくるし、グレコとセザンヌを見比べながら評論する意味がわかりましょう。

季刊 美のたより No.78

昭和62年 2月19日

発行 大和文華館